

資 料 編

寄稿 伊東忠太の住宅観と楓荻荘（現・荻外荘）	1
着工前・完了後写真	8
巣鴨棟移築建物解体前写真	13
完成写真	18
施工写真	35
保管材リスト	72
図面	76
配置図 S=1:600	
平面図 S=1:200	
立面図 S=1:200	
断面図 S=1:200	
屋根伏図 S=1:200	
居住棟（一部）・客間棟・玄関棟 1階平面詳細図 S=1:150	
居住棟（別棟・蔵） 1階平面詳細図 S=1:150	
天井伏図（主屋） S=1:150	
天井伏図（別棟・蔵1階）（蔵2階） S=1:150	
天井伏図（主屋軒裏） S=1:150	
車寄 正面図 断面図、玄関 断面図 S=1:80	
基礎伏図（主屋） S=1:150	
基礎伏図（別棟・蔵） S=1:150	
応接室 中国風テーブル S=1:10	
客間 丸テーブル S=1:10	
客間 一人掛けソファ（渦分） S=1:15	
食堂 キャビネット S=1:25	

伊東忠太の住宅観と楓萩荘（現・萩外荘）

竹中工務店 設計本部 アドバストデザイン部
伝統・レガシー建築グループ 山野 敬史

1 序

1-1 概要

伊東忠太（1867-1954）は、法隆寺の発見者であり、文化財保存に尽力した日本で最初の建築史家であり、様式が混在する建築を手がけた建築家である。また建築界で初めて文化勲章を受章した人物でもある¹。本稿は、従来あまり語られることのなかった伊東忠太の住宅観（設計思想を含む）を概観し、昭和2年に竣工した楓萩荘²（現・萩外荘）において、住宅の理想を実現した可能性を指摘するものである³。方法として、第2項において明治27年（1894）から大正13年（1914）の間に、伊東が住宅に関して述べた14稿の論考（表1）を対象に、方針、間取、構造、外観、内部、環境（設備）、起居様式という7つの視点から住宅に関する認識とその設計思想を概観し、第3項にて平面図と写真を対象に同様の視点から読み解き、その関連性を指摘する。



写真1 伊東忠太
（日本建築学会建築博物館蔵）

¹ 鈴木博之編『伊東忠太を知っていますか』王国社、2003年。

² 漢詩をつくることが趣味であった入澤達吉は萩窪の地を「楓萩凹処」と呼び、この住居を「楓萩荘」と名付けた。（入澤文明「萩窪と「萩外荘」」『風流』1968年9月、p.9）。なお、本稿では名称を旧入澤達吉邸ではなく「楓萩荘」に統一する。

³ 山野敬史「伊東忠太の中流住宅観と「標準家屋」としての旧入澤達吉邸（現・萩外荘）について」『日本建築学会大会学術講演梗概集』2023年9月、pp.301-302、同「大正期における伊東忠太の住宅観について」『日本建築学会大会学術講演梗概集』、2024年8月、pp.463-464

1-2 先行研究の概観と本稿の位置づけ

伊東忠太の住宅に関する論考に触れた先行研究に、内田青蔵と青木正夫によるものがある。内田は大正4年に開催された家庭博覧会を機に発行された『理想の家庭』における伊東の論考「住宅」を、在来住宅批判と住宅改良方針の要点を建築史の観点からまとめ、住宅改良会を中心とした住宅改良運動や、大正9年に設立される生活改善同盟会による活動内容との関連性を指摘し、それらに先行するものとして位置づけている⁴。また青木は大正5年に書かれた伊東の論考「中流の住宅は如何に設計すべきか」について、主要な考え方を紹介している⁵。しかし、いずれも伊東の20年におよぶ住宅観から位置付けるものではなく、また楓萩荘との関連性を指摘するものではない。そして、楓萩荘については、倉方俊輔の研究と株式会社建文による調査がある⁶。

表1 伊東忠太住宅関連テキスト一覧表

番号	出版年月	西暦 / 月	題目	掲載誌
1	明治27年8月	1894/08	日本建築術研究の必要及び其の研究の方針について	建築雑誌
2	大正4年5月	1915/05	住宅	『理想の家庭』
3	大正4年8月	1915/08	将来の住宅問題	建築画報
4	大正5年5月	1916/05	住宅を建築する人々に	不明
5	大正5年8月	1916/08	中流の住宅は如何に設計すべきか	婦人の友
6	大正5年11月	1916/11	坐るか腰掛けるかの問題	住宅
7	大正6年8月	1917/08	中流向の郊外住宅図	婦人画報
8	大正7年7月	1918/07	現代に適応した住宅	婦人画報
9	大正10年12月	1921/12	生活改善と住宅問題	東方時論
10	大正11年8月	1922/08	建築の与うる刺激	週刊朝日
11	大正11年12月	1922/12	住宅からみた支那	中央公論
12	大正12年4月	1923/04	余の住宅観の一片	太陽
13	大正12年6月	1923/06	我輩の文化住宅	時事新報
14	大正13年3月	1924/03	住み心地のいい住宅	婦人世界

を参考に加筆した。

⁴ 内田青蔵監修『近代日本生活文化基本文献集-ひと・もの・住まい-』別冊・解題、日本図書センター、2012年4月、pp.59-63。

⁵ 青木正夫、岡俊江、鈴木義弘『中廊下の住宅：明治大正昭和の暮らしを間取りに読む』住まいの図書館出版局、2009年3月、pp.68-74。

⁶ 倉方俊輔「伊東忠太の設計思想 妖怪としての建築」（鈴木博之編『伊東忠太を知っていますか』王国社、2003年、pp.124-125。杉並区教育委員会『文化財シリーズ46 国指定史跡 萩外荘（近衛文磨旧宅）』（2017年）における創建時平面の解説（p.15）。

倉方が、「伊東がどこまで手掛けたかということ」を考慮する必要がある」として、協力者である金子清吉に言及している点、建文が椅子、テーブル、ベッドなどの洋風な生活様式を取り入れていることについて入澤夫妻の要望による可能性を指摘している点は、創建時の建物の歴史的価値について広がりをもたせる意味で重要である一方、伊東の住宅観と建築的特徴を関連付けるもの、あるいは位置付けるものではない。

1-3 住宅実績

表2（次頁）にみられるように、伊東忠太は明治42年（1909）竣工の浅野総一郎邸にはじまり、昭和9-10年（1934-35）竣工の白石元治郎熱海別邸にいたるまで生涯14件の住宅に関与している⁷。浅野総一郎は「セメント王」とも称された浅野セメントの創設者であり実業家、二楽荘の施主は本願寺派第22代宗主である大谷光瑞、大倉喜八郎は大倉財閥を設立した実業家であり、伊東は非常に裕福な施主の住宅に関わっている。そして楓荻荘（現・荻外荘）の施主である入澤達吉は帝国大学医学部教授、内科医、大正天皇の侍医頭を務めた人物であった。伊東と入澤は義理の兄弟の関係にあり⁸、明治44年（1911）の本郷の住宅、大正14年（1925）の葉山の別邸、そして昭和2年（1927）竣工の楓荻荘といったように、相互に継続的な関わりをもったことが実績からも窺える。なお、現存する伊東忠太設計の住宅としては大倉喜八郎男爵京都別邸と楓荻荘のみとなる⁹。

⁷ 伊東博士作品集刊行会編『伊東忠太建築作品』城南書院、1941年。伊東の喜寿を祝して藤島玄治郎らが編纂した本書の巻末年表を参考に作成。当年表については、「凡例」において。「巻末作品年表は博士自ら整理せられたるものによる」とあるため、伊東の理解を直接反映するものとして参照した。

⁸ 入澤の妻である常子と伊東の妻である千代子は姉妹であった。

⁹ 明治42年の山縣有朋別荘（古稀庵）と昭和3年の大原孫三郎別邸（有隣荘）については、注4の理由により記載をしていない。なぜ記載がなかったのかは不明である。なお山縣邸は移築により一部現存、大原邸は現存している。

2 伊東忠太の住宅観

表1の通り、伊東忠太は明治27年から大正13年に至るまで約20年の間に14稿の住宅に関する執筆を行っており、それらのテキストを方針、間取、構造、外観、内部、設備、起居様式7つの視点から考察を行う¹⁰。

2-1 方針

伊東は「家庭本位」とした「理想的な住家」の必要性を、家庭博覧会（大正4年）に際して主張して以来、大正13年（1924）に至るまで一貫した認識をもっている¹¹。例えば、「完全なる家庭を作る条件は完全な住宅を作るにありと言ってもいい位家庭は家屋と離して考えることができない」¹²という認識は、改めて大正7年に繰り返し主張される¹³。

また「優雅なる趣味に富むことが絶対に必要」として、住み手の嗜好性の実現にも重きをおいている。設計者として「趣味」は「材料施工の問題の上に超越した調和によって現れるもの」であった¹⁴。さらに「事物は情と理とが相調和して初めて善美があり、「物に従って情と理の分量に等差がある」として、住居に求められる割合を「情八理二」とした¹⁵。その根底には、「人間は有情の動物である」¹⁶という強い認識があり、情に重きを置く理由として「芸術的、即ち趣味的、即ち精神的であることを要する」¹⁷ことをあげており、住み手の精神性を満たすことを重視したと考えられる。

¹⁰ 明治27年のテキストは、神社、寺院など、広く日本建築を対象とした「日本建築術」の必要性とその方針を記述したもので、その中の「普通住居」を対象にしたものである。

¹¹ 「住宅」（1915）p.128。以下、典拠については、題目と発行年のみ記載し、掲載誌については表1を参照。

¹² 同上、pp.156-157。

¹³ 「現代に適応した住宅」（1918）p.57。

¹⁴ 「住み心地のいい住宅」（1924）、pp.49-50。

¹⁵ 同上、p.48。

¹⁶ 「将来の住宅問題」（1915）、p.228

¹⁷ 注14に同じ、p.48。

表2 伊東忠太住宅関連住宅一覧表

	竣工年	西暦	作品名	関係範囲	所在地	結果	主要関係者
1	明治42年	1909	浅野総一郎邸	設計・監督	東京市	実施	主任：佐々木岩次郎
2	明治43年	1910	二楽荘	設計	神戸市六甲山	実施	主任：鶴飼長三郎
3	明治44年	1911	入澤達吉氏邸	設計・監督	東京市本郷区	実施	主任：佐々木岩次郎
4	大正4年	1915	内務大臣等官邸	設計・監督	東京市	実施	主任：佐野利器
5	大正8年	1919	大倉喜八郎氏小田原別邸	図案原案廃棄、別案に就き顧問	神奈川県小田原町	実施	
6	大正9年	1920	久米民之助氏箱根別邸の門	設計・監督	神奈川県箱根強羅	実施	
7	大正10年	1921	三井養之助氏庭内の亭子	設計	東京市	延期	
8	大正13年	1924	暹羅王宮内宮室及び庭園	設計	バンコク	中止	主任：佐々木岩次郎
9	大正14年	1925	入澤達吉氏葉山別邸	一部参画	神奈川県葉山町	実施	
10	大正14年	1925	久米民之助氏箱根別邸門	考案	神奈川県箱根強羅	中止	
11	大正14年	1925	蒲田梅屋敷旧跡保存計画	設計	東京市	一部実施	
12	昭和2年	1927	大倉喜八郎男爵京都別邸	設計・顧問	京都市	実施	
13	昭和2年	1927	入澤達吉氏荻外荘	設計・監督	東京市	実施	主任：金子清吉
14	昭和9-10年	1934-35	白石元治郎氏熱海別邸	設計・監督	静岡県熱海市	実施	

2-2 間取

伊東は住宅の「根本的条件」である「全体の「プランニング（各部布置結構）」」¹⁸を考慮することの重要性を指摘し、特に間取りについて優先されたのは先述した方針の通り「家庭本位」であることで、客間ではなく家族が団欒する部屋である居間を良い位置に配置することであった。また「一家生命の源たる大事な」¹⁹台所を優遇することや子供部屋を良い位置に配置することでもあった。

2-3 構造

伊東は家屋が密集する市街の下町では、耐火・耐震性能は必須であり、住宅等家屋が少ない郊外ではそれらは必要ないとして、立地条件により住宅の仕様を区別している²⁰。また耐火耐震性能については明治27年以降、「堅牢」かつ「能く震災と火災とを防ぐべき」という一貫した認識をもっており、具体的には「壁の領分を多くし、建物の領分を少なくした方が、構造上丈夫でもあり、住まいにも便利点がある」²¹と述べている。

2-4 外観

¹⁸ 注11に同じ、p.116。

¹⁹ 「中流の住宅は如何に設計すべきか」（1916）、p.25。

²⁰ 「余の住宅観の一片」（1923）、pp.148-149。

内部も含めて共通することとして、伊東は「住む人の身分に相応しいもの」こそ「真の良い建築」として認識している²²。外観に対する認識としては、「家の外観にも表情があるはずのもので、主人の性格趣味が表れなければ面白くありません」とし、「間取具合や設備等ばかり指図して外形は大工に任せきり」にするという当時の建築家の在り方を批判的に捉えていた様子が窺える。日本に根付いた大工の「一定の型」、あるいは「プランニング」に考えが及ばず大工任せにする当時建築家に対し、職能のあるべき姿を主張するあたりに伊東の建築家としての矜持と社会的課題を改善しようとする意志が窺える。

2-5 内部

内部に関して伊東が重視しているのは「色」である。例えば、住宅が長時間滞在している場所であることを前提に「落着いた温雅な色、即ちなるべく原色的でない色が住家としての目的適応している」²³あるいは、部屋に入った印象を支配するものとして

²¹ 注19に同じ、p.27。

²² 同上、pp.25-26。

²³ 注11に同じ、P.127。

「その室に特有な色合で、壁の色、柱の色、疊襖の色合等、それ等の間に色彩の調和がなければなりません」²⁴、また後年に「客間や食堂の如き、短時間づつ使用する所は、美を損じない程度に於て、稍華麗な色彩を用いても差し支えありませぬ。」²⁵と、長時間居る部屋とそうでない部屋とで用いる色の質を使い分けながら、敷物を含めた部屋を構成する備品や建築部材との色の調和を伊東が重視した様子が窺える。

2-6 環境（設備）

明治27年（1894）から、方位、採光、温度に配慮し、暖房通風や排水・吸水装置を設置することを良しとしており、「住宅に要する材料に余り多くの費用を投ずるよりは、設備の方に資力を注ぎたい」として、排水、給水、電灯、ガスにも十分な設備を備え、「設備を完全にしたい」と述べている²⁶。また住宅の住み心地を良くするという観点から室内の調度や装飾品に注意を払う必要性を説いており、伊東が「設備」という用語を住環境に関わる広義なものとして用いている点で注目値する。さらに「郊外建築」が、事務所のような「市街建築」とは異なり、「家庭的な即ち純然たる住宅建築」であり、日照、通風、衛生、趣味に適し、適度な運動や精神の慰労、理想的な育児ができる環境にあることへの言及²⁷は後述する楓萩荘が郊外に建てられた住宅であることを考えると非常に重要である。

2-7 起居様式

書斎、応接間、子供部屋においては板敷とし、椅子やテーブルを用いた生活を推奨している。特に子供部屋を椅子式とする理由の一つとして「姿勢を良くする」²⁸ことをあげている点は、義理の兄弟である入澤達吉が人間の姿勢の研究者でもあったことを考えると、その影響による可能性がある。また伊東は、大正5年（1916）には、「我国の住宅改革は、真面目に研究されるべき大問題」との認識のもと、

その「根本問題」として「坐るか腰掛けるかの問題」があり、答えが断定されずとも気候風土や歴史と衣食住との関係の研究が重要だとの認識をもっていた²⁹。

3 楓萩荘の建築的特徴

楓萩荘は、3度に渡り内閣総理大臣を務めた近衛文麿が住み、萩窪会談など歴史的に重要な場所であり、現在は国指定史跡「萩外荘」として知られる。その近衛は「長年健康の相談相手だった」³⁰入澤達吉から当家屋を譲り受け、その際に聞き取った内容を次のように記している。「親戚の伊東博士が、自分に任して、自分の思う通りの家を建てさせて呉れ〔ママ〕と申し込んだのを承知して、伊東博士に一切を任されたそうである。伊東博士は、将来の日本家屋の標準を打ちたてるのだというえらい抱負と意気組で、苦心経営、設計だけでも半歳を費やし、工事に二年あまりをかけ、昭和三年〔ママ〕に漸う竣工した」³¹（下線部は筆者）と。当テキストは、伊東忠太が「将来の日本家屋の標準」を念頭に設計した可能性を示唆するものとして重要である。なお、入澤達吉が萩窪に新居を求めた理由として、心臓の病から郊外の地で静かに暮らすことを求めたこと、「お客は自分の家に招待する」という思想に基づく新居を持ちたいと考えたことも述べられている³²。

3-1 間取

玄関は東端に位置しており、すぐ北側に応接室がある。玄関から西方向に廊下が伸びており、その北側に台所や女中部屋、浴室や便所が配置されている。長い廊下のほぼ中央の位置より南北に廊下が配置されており、南に延びる廊下の西側に家族用の諸室（居間、茶の間、食堂、書斎、寝室）、東側に客用の諸室（客間、次の間）が配置されている（写真2参照）。以下平面図から読み取れる特徴は以下の5点である。①廊下によって部屋の用途ごとのまとまりが区画されていること②それぞれの部屋が廊下

²⁴ 同上。

²⁵ 注13に同じ、P.59。

²⁶ 「住宅を建築する人々に」（1916）、p.69。

²⁷ 同上、p.67。

²⁸ 同上、p.70。

²⁹ 「坐るか腰掛けるかの問題」（1916）、p.3。

³⁰ 入澤文明「おやじ（22）入澤達吉 臨床の妙」『朝日ジャーナル』Vol.6、No.9、1964年3月。

³¹ 近衛文麿「萩外荘清談（三）」『政界往来』、政界往来社、1940年3月、p.36。

³² 入澤文明「萩窪と「萩外荘」」『風流』1968年9月、pp.8-9。

によって結ばれていること③客用の諸室と応接室の面積が全体に占める割合が大きいこと④家族用諸室（寝室、書斎、食堂）と客用諸室（客間、次の間）が南面かつ雁行して配置されていること⑤柱数の多さとその配置、である。

これは例えば、「家屋が堅牢」かつ「本箱や筆筒等の置き場」を確保するために「二間に襖を四枚用いるよりは、左右三尺づつ〔ママ〕を壁にして中部の一間を襖にするような方針を採りたい」とした方針に近いものだと考えられる³³。

3-2 構造

柱の数が非常に多く、客間のように、L字形の小壁ができるように、片開戸がうまく配置されている。

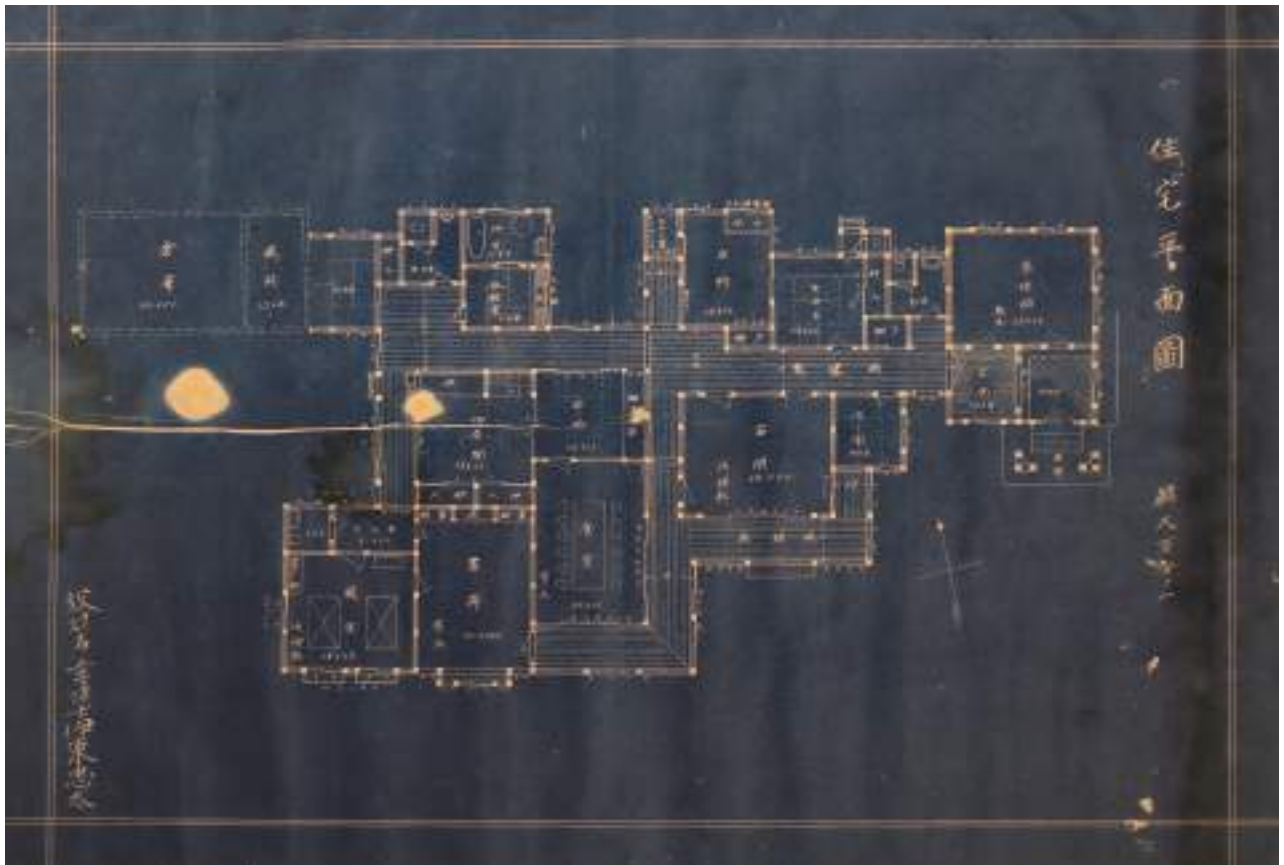


写真2 伊東忠太直筆「住宅平面図」（杉並区教育委員会蔵）



写真3 創建時南面外観（個人蔵）



写真4 創建時応接室（個人蔵）

³³ 「住宅」（1915）p.128。

3-3 外観

写真3（前頁）にあるように、小高い丘陵上の敷地に南面して当建物が建てられている点は、「日当たりがよく、展望がよい部分を家族の住まいにあてる」という伊東の中流住宅の設計思想に合致する。また入澤の書斎の窓の部分が少しはね出されて切妻の屋根がかけられている点は、先述した「主人の性格趣味」の表れとして読み取ることもできよう。

3-4 内部（応接室、客間、食堂、居間、書斎、寝室）

応接室は写真4（前頁）のように中国風のデザインで統一され、天井に龍の絵画、床に龍の敷瓦、螺鈿の家具、山水の掛け軸が設置されており、漢詩を趣味とした入澤達吉の好みをよく反映するものと考えられる。また片開の木製扉は上部に硝子と装飾が施され、設計的に注力されたものになっている。

客間は板敷として、平面図に「絨毯敷」とあるよ

うに最初から意図して設計されたことが窺える。天井が高く、二重に長押が配置され、上部は縦格子、中部と下部には壁紙があしらわれ、中部には架空の動物が列をなした模様とされ、後述する食堂と合わせて「短時間づつ使用する所は、美を損じない程度に於て、稍華麗な色彩を用いても差し支えありません。」と主張した伊東の認識に合致していると考えられる。また絨毯の色について、伊東の帝国大学の卒業論文『建築哲学』における「色彩論」の項にて「補充色」として赤と緑が補色関係にあることを指摘している。なお、入澤達吉の次男である文明によると欄間の文様、壁紙の図案は「博士自ら筆をとる熱の入れよう」で、日本間の襖絵は田辺碧堂が描いたとしている³⁴。



写真5 創建時客間（個人蔵）



写真7 創建時居間（日本建築学会建築博物館蔵）



写真6 創建時食堂（日本建築学会建築博物館蔵）



写真8 創建時書斎（個人蔵）

³⁴ 注32に同じ。

3-5 設備

遺構調査時に浄化槽が発見されており、また創建時の図面からも応接間脇のトイレが水洗であったと考えられる。明治27年よりすでに「排水装置」の設置を推奨していた点からも、伊東の設備機器に対する進んだ考えを窺える。

3-6 起居様式

伊東忠太直筆の平面図（写真2）や内観の写真からも明らかなように、茶の間、居間、化粧室と女中室は畳敷、それら以外の部屋はすべて板敷となっている。明治から大正にかけて、旧来の生活様式である坐式に対する洋風の生活様式である椅子式の普及に代表されるように、和洋の混在した生活様式は「折衷」と称された。しかし伊東は住み手の趣味などから、日本人が住むように「西洋風を加味した建築」を「折衷建築とか二重建築」という非難を避け、「新日本式の建築」とでも称することの妥当性を主張しており、住み手に合わせて起居様式を選択している可能性が窺える。

3-7 建具

最後に、内外観の大きな要素の一つとして建具に着目したい。伊東は『中流住宅』の中で、「建具も閑却すべからず」という節で、建具の在り方についても現状を批判し、次のように述べている。それは工事が進むにつれ、費用が予想に反して膨れることで予算が減り、建具が悪く、みすばらしくなってしまうことを嘆き、「はじめから別に予算をとっておいて、その家相当のものを使いたい」³⁵と述べている。現・萩外荘には創建時の多くの建具が現存しており、応接間、客間の木製建具や、南側縁側のガラス戸や欄間などはいずれもデザイン的に注力されたものとなっており、伊東の設計思想を反映するものとして非常に貴重である。

4 結

楓萩荘の間取、構造、外観、内部、設備、起居様式、さらには建具の特徴と伊東の住宅観や設計思想には対応するものが多く、明治27年から大正13年に至るまで伊東の住宅観や設計思想が大まかには一貫している傾向が窺えることから、本建物にて「住む人の身分に相応しい」、性格趣味を反映した「真の良い建築」、そして「日本家屋の標準」を実現した可能性が高いと考えられる。



写真9 縁側ガラス戸と欄間（筆者撮影）

³⁵ 注19に同じ、p.29。